

銅(電気銅・電線・伸銅品)の需給動向

鉱山

経済産業省は六月、平成十四年度民間設備投資計画の基礎資料として、平成十四年度電気銅需給見通しを策定した。

平成十四年度の銅地金生産は複数の生産者が需要低迷を背景に減産を実施することから、二〇・七％減の三十七万六千トンと、一部製錬所の改修工事を主因に減産となった前年に引き続き二年連続で減少する。

内需は報告値ベースが二・二％減の二〇三万七千トン、過欠補正後の見掛値が二％減の二〇七万二千トンと昭和五十二年度以来の低水準であった前年をさらに下回る。

日本経済は十二年後半から十三年初めにかけて景気後退局面に入り、十三年度の実質GDP成長率は二・三％減、鉱工業生産指数は二〇・二％減と、ともに下げ幅は比較な調整局面となった。この理由としては、①世界的なIT(情報通信技術)パブルの崩壊、②消費の低迷持続、③不良債権・過剰債務の重圧による消費マインドの沈静化・設備投資意欲の減退などがあげられる。十四年度については、当初、米国の景気回復に牽引されて日本経済も輸出主導による緩やかな回復が期待されたが、米国内需は株価が暴落するなど再び失速しており、日本経済への波及懸念も高まっている。

用途別には、電線向けは三・八％減の六十六万二千トンと昭和五十年年度以来の低水準となった前年をさらに下回る。部門別には建設・電気機械・自動車をはじめ全部門が前年度割れとなる。伸銅品向けは〇・四％増の三十五万トンとIT関連の板条需要の底打ちから〇・四％増と三年ぶりに微増となるが、水準としては昭和五十一年度当時にとどまる。

生産・内需ともに減少するため、輸入は一七・六％減の十万と昭和四十二年度以来の低水準に減少、輸出も過去最高を記録した前年比二九・九％減の二十九万五千トンへと減少する。この結果、総在庫は十三万トンから十三万トンへとほぼ横ばいで推移する。

日本鉱業協会 〇三(三三五一)七四五二

平成十四年度電気銅需給見通し

年度項目	14年度予測			前年度比%	
	12年度実績	13年度見込	14年度合計		
期初在庫	132.8	113.2	120.0	120.0	6.0
生産	1,456.3	1,405.0	689.7	686.3	▲2.1
国内鉱出	0.9	0.2	0.1	0.1	0.0
海外鉱出	1,309.3	1,263.1	619.6	616.2	▲2.2
その他出	146.1	141.7	70.0	70.0	▲1.2
輸入	208.8	138.1	55.0	45.0	▲27.6
供給計	1,797.9	1,656.3	864.7	856.3	▲23.7
内需(報告値)	1,339.2	1,060.4	512.0	525.0	▲2.2
(見掛値)	1,385.4	1,083.0	524.7	546.3	▲1.1
電線	844.2	686.8	325.0	336.0	▲3.8
伸銅品	464.4	348.6	174.0	176.0	0.4
その他	30.6	25.0	13.0	13.0	4.0
輸出	299.3	453.3	215.0	180.0	▲12.9
需要計	1,638.5	1,513.7	727.0	705.0	▲5.4
期末在庫	113.2	120.0	125.0	130.0	8.3
過欠補正	46.2	22.6	12.7	21.3	34.0
設備能力	1,460.9	1,496.4	748.2	748.2	1,496.4
稼働率%	99.7	93.9	92.2	91.7	92.0

(出典) 経済産業省

電線

平成十四年上半期の銅電線需要は、三十九万七千トンと前年同期を九・〇％下回り、二年連続の前年同期比マイナスとなった。需要部門別にみても通信部門以外の全部門で前年同期比マイナスとなっている。

通信部門は、光化の進展に加えNTTの設備投資圧縮が続き、メタルケーブル需要は長期漸減が続いているが、今期は通信施設からみの需要があり一時下げ止まっている。

電力部門も通信部門同様、電力会社の経営効率化と電力需要の伸び悩みにより設備投資抑制強化が続いており、電線需要は引き続き減少傾向にある。

電気機械部門は、IT不況に加えて電機製品生産の海外シフトが進んでいるため急激に落ち込み、その後低迷が続いている。半期十割増の伸びは昭和五十三(一九七八)年以後のレベルである。

自動車部門は、国内自動車生産が堅調ではあるが、前年比微減と見られ、電線需要もこれに応じて若干マイナスに推移している。

建設・電販部門は、引き続き国内景気の低迷により民間企業設備投資が回復せず、一部首都圏の大型再開発件名はあるものの総体的には低調に推移している。

その他内需部門も建設・電販部門同様、民間企業設備投資の回復が進まないところから低迷が続いている。輸出部門は、米国内需の減速や東南アジアの現地メーカーの成長により、引き続き厳しい環境にある。

(社)日本電線工業会 〇三(三五四)六〇三三

平成十四年上半期出荷実績

部門	13年			14年上期	前年同期比%
	上期	下期	計		
通信	11	9	20	11	2.1
電力	46	43	89	42	▲9.4
電機機械	111	97	208	97	▲13.1
自動車	35	34	69	34	▲2.2
建設・電販	180	185	365	164	▲8.5
その他内需	32	31	63	31	▲2.3
内需計	415	399	814	379	▲8.6
輸出	21	18	40	17	▲18.6
合計	436	418	854	397	▲9.0

(注) 1.四捨五入のため計と合わない場合もある
2.前年同期比は数量を丸める前の原伸び率
(出典) 日本電線工業会統計

伸銅品

平成十四年上半期の伸銅品需要は、四十八万トンと前年同期を二・三％下回ったが、近年の最低水準であった前期よりは増加し、底打ちから僅かながら回復基調で推移した。

金属製品は日用品が文具の低調などで低迷、ガス機器は前年割れ傾向が続き、水栓金具、雑貨なども住宅不振の影響が大きく低調な推移を辿った。

電気機械は年初から半導体やコネクタの特に海外需要が回復に転じ、糸製品が十二年のピーク時には及ばないが増加傾向となった。一方、配電制御装置は設備投資不振で減少したまま、弱電部品も回復までは至らなかった。

輸送機械は自動車予想以上に健闘したが、全体としては下げ止まりの域を出なかった。

精密機械は減少基調に歯止めがかからないまま低迷した。一般機械は空調機器がエアコン販売の前年割れ傾向と海外生産の持ち帰り増加で、国内マーケットの縮小が本格化する他、バルブ・コックも低迷したままであった。

建設業は屋根板、建築管とも大きく減少し、近年にない低水準のまま底意が続いた。

全ての内需分野が前年を下回ったため、内需計は三十九万トン強に留まり、ITがらみの糸だけの回復で前期よりは多少戻した水準となった。

輸出は半導体・コネクタなど電子部品向け糸製品の回復が見られたが、銅管は中国向け不振の影響で低水準に、また黄銅棒も回復というレベルには至らなかった。

日本伸銅協会 〇三(三三三六)八八〇一

平成十四年上半期出荷実績

部門	13年			14年上期	前年同期比%
	上期	下期	計		
金属製品	78	66	144	65	▲17.3
電気機械	132	111	243	124	▲6.3
輸送機械	35	30	65	32	▲7.9
精密機械	7	7	14	6	▲12.8
一般機械	87	69	156	74	▲14.6
建設業	15	15	30	12	▲18.3
その他内需	91	76	167	78	▲13.9
内需計	445	374	819	391	▲12.0
輸出	90	75	165	89	▲1.9
合計	535	449	984	480	▲10.3

(注) 前年同期比は数量を丸める前の原伸び率。
(出典) 経済産業省統計